

# 庭の小鳥



ミヤマカケス

昨年十二月五日、帝国ホテルで日本野鳥の会会長の中西悟堂先生の文化功労者顕彰祝賀会が開催された。なにぶん、大親分のおめでたなので、外来診療を休んで上京した。道内から参加したのは、道栄養短大の井上元則博士と私の二人であった。

自然保護にゆかりのある方で、中西さんの名前を知らない人はいないだろうから、ここであえて、数十年に及ぶ「野鳥」の研究、保護一途に歩いてこられた業績については触れる必要があるまい。

二〇〇人に及ぶ出席者の面々は宗教界、政財界、文学、美術などにゆかりのある人々、野鳥の会々員など多方面にわたり、やはり異色ある祝賀会であったように思う。昔、お世話になった方で三十年ぶりにお会いした方もあった。歌人であり文学者である浅野 晃先生もその一人であった。私は北大皮膚科泌尿器科教室に在局中、一度だけ、いわゆる地方へ出張したことがあった。昭和二十三年のこと、現在苫東地区として開発の話題の焦点になっている国策パルプ勇払工場の病院である。水野重夫氏は、まだ副社長の時代で、「ガマの聖談」で有名な南 喜一氏は重役の一人であり、ずいぶん変わった面々の経営する会社だと思つた。文化面では終戦の余蘞さめやらぬ、うつろな時代でもあったので、この工場時

代、見聞したことが現在でもまざまざと眼前に展開されるのである。水野さんは仏文学者であり、アンドレ・モロアの話を読んだことがあったし、浅野さんは万葉集とフロイドの解説をよくして下さった（川上澄生氏も昔小牧におられた時代）。

当時、あの地方には手つかずの北海道の自然が残されており、鳥の数も多かった。シギ、チドリの大群が海浜に近い住宅の屋根すれすれに移動していった。外来は多忙であったので、すっかり疲れてしまい、その大群の声は騒音以外のなものでもなかった。当時はいまほど鳥の名前も知らなかったし、食糧難の時代なので、一方、猟期にカモ類をとどけてくれるハンターのH氏の好意も、うれしかったのが事実である。

広い勇払原野は春から秋まで次々と野の花が開き、耳をすませば草原の鳥たちのコールラスを聞くことができた。浅野さんは散歩の途中、じっと小鳥の姿を見つめておられることがあった。「ホオジロがたくさんいますね」と指さされた先に二羽の鳥がいました。それはホオジロでなく、ホオアカであったので、「地上におられるのはホオアカでしよう」と私が訂正した。先生の草原の鳥を歌ったものは少なくないが、私の記憶にあるのは次のものである。

いぶり野の野焼のあとの夕風ゆづりに

きこえてゐるは頬白の声

帝国ホテルの会場で「勇払原野は鳥が多かったですね」と、昔を思いだして話はずんだが、もちろん現在では昔日の面影はない。私は毎年何回か車を走らせて、あの地帯の鳥を見に行く。しかし、あの当時見た渡り鳥の大群、それこそヒッチョックの映画「鳥」に出てくるような鳥の群には出会ったことはない。

北海道は野鳥の天国といわれている。しかしマチの小鳥たちはどうだろうか。残念ながら、私の住んでいる札幌市の小鳥たちは、おどおどして私達に近よろうとしない。道庁の池くらのスペースがあれば、沢山の鳥たちが騒いでいたヨーロッパでの光景を思い出し、比較せざるをえないのである。ロンドンのセント・ゼームス・パークやリーゼント・パークの人に馴れた鳥たち。東アフリカのケニアの南部地方は鳥密度の高い地方で一アール当り一羽ということになっているが、ロンドン・シティーでは、この数を少々下まわるにすぎないといわれている。さて、札幌と東京を比較してみよう。世界のマンモス都市の一つ東京。思つたより都心部でも、野鳥の姿を見るし、また人に馴れた鳥も多い。都内には皇居をはじめ、昔から公園も少なくなく、緑地帯が散在している点も関係があるかも知れない。



ヒ ガ ラ

い。

私はかつて本文の題名と全く同じ『庭の小鳥』という一冊の本を鶴書房から出版したことがある。カバリーのカラー写真から、中のグラビアアまで全部お世話になったのは野鳥の写真として有名な世田谷の佐伯敏子女史であった。本のカバリーに印刷した推薦文を書いて下さったのは女優の榎山文枝さんであった。彼女はテレビ・ドラマ「おはなはん」の終わったところで、人気絶頂の時代であった。お世話になったので、出版社からお礼に行くとき同行してほしいとのこと、私は上京した。佐伯さんとは以前から手紙の往復があり、御夫君が国語・古文学者として有名な佐伯梅友先生であることも知っていた。この時は初対面で、同行のS編集者と世田谷のお宅にお邪魔した。以前は静かな住宅街であったのだが、もうこの時は環状七号線が、近くをかすめ自動車のひっきりなしに通過する場所になっていた。冬だったのでコタツの中からの「探鳥」。次々と小鳥たちが佐伯さんの庭を訪れる。キジバト、ヒヨドリ、ムクドリ、カワラヒワ、オナガ、ジョウビタキ、メジロ、ウグイス、シジュウカラが多い。

屋さんに作ってもらって、それにキジバトがやって来たのは始まりであった。庭に餌台を置き、最初は御子息のカメラで撮影されたようだが、ご承知のように、いまでは全国的に名を知られた「庭の野鳥」の写真家になられた。長焦点レンズをつけたカメラを操作される姿を見て、養老院や、われわれの外来を訪れる、おばあさんの姿が、ちらりと脳裏をかすめた。中西先生の祝賀会にも出席されていたので、久方ぶりにお話しする。まだまだお元気で、その意欲は青年なみであるのに感心した。

野鳥に対する給餌の問題など、学術的にはまだ解決済みではないが、大きな都市の公園などで、住民と野鳥たちのアプローチがヨーロッパ並みであったよと考えるのは私だけだろうか。

もちろん、野鳥保護自然保護の問題などいままでのサロンの風潮のみでは不完全で、おのずから公害や、環境保全のテーマと正前からたち向わねばならぬのは当然である。ただし、「公害」は、生やさしい問題ではなく、複雑で恐るべきポテンシャルを持った怪物であることを知らねばならぬ。この怪物は、他の天体や人間社会の外部からやって来たものではなく、私たち自身が社会の中に生みおとした怪物である。そういう意味では公害に対する戦いは、いわば人間社会における「内戦」のようだとはいえるようである。鳥たちは、やはり公害や化学物質の汚染の指標になっていることを考え、人間も有用な生物も共存できる健康環境を建設し、それを子孫にのこす仕事に道民のすべてが関心を持たねばならぬ時代がやってきた。

故・レイチェル・カーソン女史の名著「サイレント・スプリング」には次の一文がある。「本当にこの通りの町があるわけではない。だが、多かれ少なかれ、これに似たようなことは起こってくる。……おそろしい妖怪が、頭上を通りすぎて行ったのに気づいた人は、ほとんど誰もいないのだ。そんなのは空想の物語さ、と皆いうかも知れない。だが、これらの禍がいつ現実となつて私たちにおそいかかるか——思い知らされる日が来るだろう。」

そしてカーソン女史の予感、不幸にも的中したのであった。

(医師・日本野鳥の会札幌支部長)